

## 高齢化社会と リスクマネージメント

副病院長兼看護局長 藤野 正子



**新** 年あけましておめでとうございます。いろいろな問題があつた一年、その中でも患者さんのために懸命に良い医療を提供しようとする職員と、地域の関連施設のみならずご協力に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

さて、超高齢社会や多死社会という言葉も聞きなれてきました。中医協の調べでは急性期病院の7対1は10対1に比べ高齢者の割合が少ないと言われていますが、当院でも65歳以上の患者の割合は約52%です。

高齢者は反射・反応の低下、視力・聴力と言った感覚機能の低下や「これくらいなら自分でできる」と過信しているところもあり、転倒・転落が毎日のように発生している現状です。過剰な抑制はせん妄や認知症を進めることにもなるため、さらに、事故防止は困難さを増し、必要な対策をとつても完全に防ぎきれないのが実情です。また、高齢者は歯の欠損や嚥下機能低下による誤嚥のリスクも高く、記銘力の低下によるコンプライアンス不良も大きな問題です。

ご家族は、「病院の中で看ているから何事も起こらないのが普通だ」と思われています。この高いリスクに気付かれていない

かもしれない。何でもお任せくださいには無理があります。やるべきことを決して放棄してはいけません。患者さんの状況と、私たち医療者側は何かできるのかをしっかりと説明し、ご家族が協力していただけることはあるかどうかの確認をしましょう。ことが起こってから「それなら私達に言ってくれば」というご意見を聞くことも多くあります。ご家族もチーム医療の中のメンバーであることを、医療者側は忘れないでいきましょう。

また、無断離院を大きな問題だと考えています。新しい環境に適応しにくく、記銘力の低下などが相まって、当院だけではなく、全国的に多くなってきたインシデントです。事故の影響度が高くなる場合があるだけではなく、探す努力も並大抵ではありません。現在、顔認証のカメラの設置をお願いしているところです。それ以外にも人生の最終段階での意思決定支援など高齢者のリスクは数多くあり、これらの問題を看護局だけではなく病院全体で考えて行ければと思っております。

## 魅力ある病院・ 魅力ある研修システム とは何か

診療局長兼臨床研修委員会委員長 烏野 隆博



**医** 師として活躍する場合に、そのキャリア形成に大きく影響を与えるのが「専門医」資格です。そして「その専門医の質を高め、良質な医療が提供されること」を目的に、2018年度から新専門医制度が開始されます。しかしその一方で、超高齢化社会の現在、患者は複数の疾患を抱えており、全人的な視点から患者を診る目も養う必要があり、そういった意味から、自分の専門分野以外にも幅広く関心を持つことは重要だと考えています。そこで、当院の初期研修プログラムは型にはまったプログラムではなく自由選択を基本としており、非常に柔軟なプログラムとなっています。さらに研修医の意見を取り入れ、地域医療研修の中に離島研修を組み入れており、隠岐広域連合立・隠岐病院での離島研修が可能となりました。また、初期研修医にとって日常診療や救急ですぐに役立つ知識・技術などを得る目的として、これまで開業医の先生方を対象の中心としていた「臨床集談会」を研修医の基礎知識の向上のための「クリニカルレベルアップセミナー」と改名し、テーマを決めて院内の専門医にレクチャーをしていただいたり、また

その中で実践セミナーとして超音波検査（腹部・心）を行ったりしています。このように指導者と研修医とが、お互い意見を交換することで今後も魅力ある研修プログラムを構築していきたいと思っています。

医療を担っていくには、「知」と「感性」を身につけることが重要であると考えています。「知」とは知識や技術であり、「感性」とはセンスや多様性を受け入れるコミュニケーション力を示します。これを持った医師を育成するうえで、地域基幹病院として「軸足は地域に」、さらにグローバルに飛躍することを目標として「視線は世界に」を研修の基本理念として掲げています。常に医療はベッドサイドから始まります。受け持ち経験数だけでなく、一人ひとりの患者を深く、掘り下げて病態等を考えていく思考プロセスの中で、患者の少しの変化を感じとる技量、そしてセンスを磨くための方策を教育していくことも大切です。理念の副題である、「共に学び、共に育つ」は、上級医と研修医であるとともに、また患者と医師でもあります。この理念に従って研修医を育成し魅力ある病院としていきたいと思っています。